

STATISTICS

# 結婚と子どもは幸福度を押し上げる

麗澤大学 未来工学研究センター 教授 宗健

6月2日に厚生労働省が発表した令和4(2022)年人口動態統計月報年計(概数)の概況によれば、2022年の出生数は前年の81万1622人から4万875人減(5%減)の77万747人となり、合計特殊出生率は前年の1.30から1.26と2005年と並び過去最低となった。

一方で、子どもがいることが幸福度を下げる、という言葉もあり、ダイバーシティの観点からも子どもを持つかどうかは個々人の自由とされている。

そこで、本稿では「いい部屋ネット 街の住みこちランキング」の2020年から2022年までの3年間の回答者の個票データを用いて、「結婚していること」「子どもがいること」が主観的幸福度にどのような影響があるかを、筆者の意見ではなく統計分析の結果として解説する。

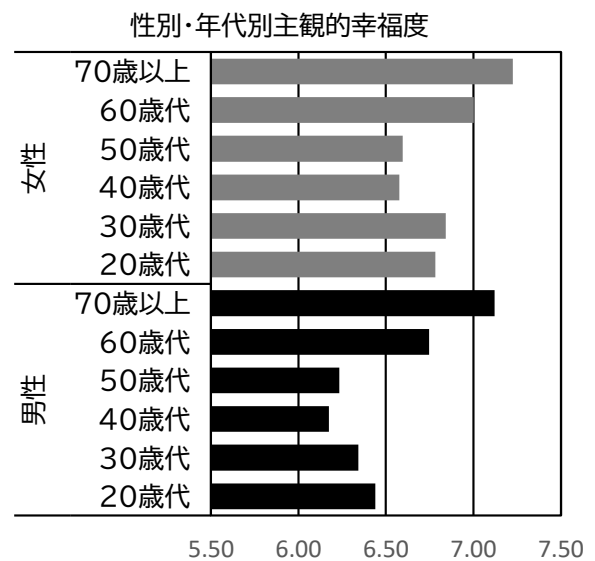
## 主観的幸福度とは

近年では欧米を中心に幸福度に関する研究が盛んに行われており、OECDも2012年から5冊の幸福度白書を発行している。

主観的幸福度の研究では生活満足度を幸福度と見なす場合もあるようだが、生活満足度と主観的幸福度は異なる概念であり、生活満足度は低い幸福度は高いといったケース、またその逆も考えられる。そのため、住みこちランキングの個票データでは、「あなたは現在、幸せですか、あるいは不幸ですか」という設問に

対して、非常に幸福を10、非常に不幸を1として回答を得ている。

この10点満点の主観的幸福度を性別・年代別に平均値を集計してみると、下図のようになる。男性よりも女性のほうが幸福度が高く、男女とも40歳代・50歳代の幸福度が相対的に低く70歳以上になると高くなっている。

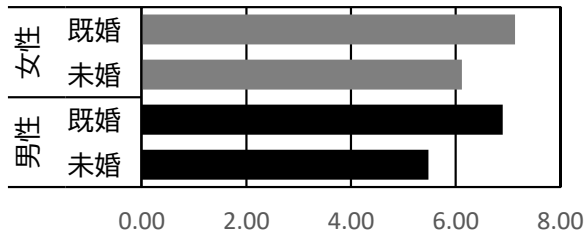


## 結婚は幸福度を押し上げる

「一人は食えぬが二人は食える」ということわざは現代では通じないようで、厚生労働省の第16回出生動向基本調査(2021年)によれば「独身でいる理由」に「趣味や娯楽を楽しみたいから」「独身の自由さや気楽さを失いたくないから」といったものが挙げられており、結婚することで経済的に余裕をつくるという考えはなくなってしまったようだ。

しかし、主観的幸福感という観点では、性別・未既婚別に主観的幸福感の平均値を集計すると、既婚者のほうが幸福度が高い。

性別・未既婚別主観的幸福感



この傾向は男女それぞれの年代別に集計しても同じで、未婚者よりも既婚者のほうが幸福度が大きく高いのは男性は20歳代と70歳以上を除く全年齢、女性の場合は30歳代であり、結婚することで幸福度が上がるのは男性のほうのようだ。

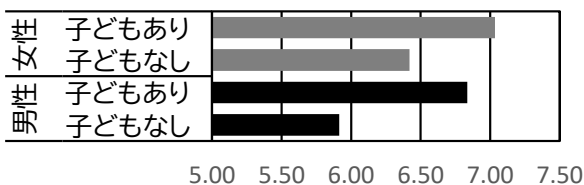
### 子どもは幸福度を押し上げる

子どもがいると確かに経済的な負担や日常生活の負担は大きくなるため、生活満足度が下がる可能性がある。

しかし、多くの人を感じていると思われるが、そうした自分自身の制約や経済的負担とは別に幸福感が高まるケースも多いだろう。

実際、性別・子どもの有無別に主観的幸福感の平均値を集計してみると、子どもがいるほうが主観的幸福感が高くなっている。

性別・未既婚別主観的幸福感



この傾向は男女それぞれの年代別に集計しても同じで、子どもがいるほうが幸福度が大きく高いのは、男性30歳代、40歳代となっている。

ただし、男女ともに70歳以上になると子どもがいることの主観的幸福感への影響は明らか

に小さくなる。これは、どうやら幸福度を押し上げる要因が子どもから孫に変わることが背景にあるようだ。

### 年収等を考慮しても傾向は同じ

こうした結果に対して、結婚と年収の相関関係は強く、幸福度に対する年収の影響もあるのではないかと、といった指摘もあると思う。

そこで、年収や学歴、持ち家かどうかなどの個人属性を考慮して分析してみると(変数統制するという)、結婚していることと子どもがいることはほとんどの場合で統計的に有意に主観的幸福感を押し上げる効果がある、という結果となっている。

さらに興味深い結果として、現時点で未婚であったとしても過去に結婚したことがある場合は、結婚の経験がない場合よりも幸福度が高いという結果が出ていることが挙げられる。

これは、ダメなら離婚すればいいからとにかく結婚してみることだ、というのをデータが示唆しているということになる。

また、子どもの数は幸福度にはあまり影響はないが、女性の場合は4人以上になると幸福度がやや下がる、という傾向がある。これは子育ての負担が女性に集中しているためだろう。

結婚するかどうか、子どもを持つかどうかは、現代では価値観に従って個々人が選択するものだが、データは、結婚したほうが、子どもがいたほうが、主観的幸福感が高まる確率が高いという結果になっているのだ。

なお本稿のベースとなった分析は、「いい部屋ネット 街の住みこちランキング 2022<総評レポート②>」として公開されているので、詳細はそちらを参照いただきたい。

[https://www.kentaku.co.jp/miraiken/market/pdf/research/sumicoco/release\\_sumicoco2022\\_summary\\_2\\_20230419.pdf](https://www.kentaku.co.jp/miraiken/market/pdf/research/sumicoco/release_sumicoco2022_summary_2_20230419.pdf)